

## 宗教者が見た東日本大震災



東日本大震災と宗教、心のケアについて語る玄侑宗久さん(左から3人目)ら

||京都市左京区で

東日本大震災は、地震と津波、原子力発電所の放射能漏れ事故という甚大な被害をもたらしている。被災地ならずとも、人の心のありようは変化しつつあるのではないか。「京都大学こころの未来研究センター」は20日、宗教と「心のケア」を考えるシンポジウムを京都市左京区で開いた。約130人が参加し、福島県の臨済宗妙心寺派寺院の住職で芥川賞作家の玄侑宗久さんは「何万年も半減しない放射能は、仏教の無常の原理に反してしまう」と語った。【鶴谷真、写真も】

### 玄侑宗久さん「無常の原理に背く放射能」

玄侑さんは、原発から大量の放射能が流れた事実がすぐに公表されなかったり、「直ちに健康に影響ない」とされながら野菜が突然出荷停止になった事態を受け、「福島では情報価値が暴落し、『どうせ、また』という心情が芽生えている」と分析。福島県の浜通りには30

に不安のある人にとっては、生きていけないほどのダメージだ」と語る。会場は静まりかえった。同研究センターの鎌田東二教授(宗教哲学)は、被災地の神社を巡った。仙台市の浪分神社は、平安期の大津波の後に「こままで波が来た」として建てられたといわれ、岩手県には鳥居の手前まで壊滅、奥は無事という神社もあった。「神社

また、死と不可分の「無常」や、思いやりを示す「慈悲」などの言葉から「仏教には悲しみの音調が流れている」とし、俳人・小林一茶が肉親を失いながら、文芸の中でたくましく仏道を表現した例を紹介。今後の日本人の生き方のヒントになり得る視点を示した。

0もの神社があるといわれ、「地震や台風など自然災害が怖いから、

無事という神社もあった。「神社

鳥園さんが「行政関係者は、心のケアと言えはまず臨床心理士が精神科医。宗教者は布教するので

### 「心のケア」主題に京都でシンポ

神様を祭ってきた。『おひえ』は大切。国の原発事業はウランやフルトニウムを怖いと認めず、神道の基盤をぶちこわしたと憤った。

に巨岩や巨木があるのは、そこが長期にわたり安定しているから」とで、「防災の記念碑」としてもっと注意を払うべきだと指摘した。

は「宗教はより深い『意味の喪失』に直面した際に出番がある」と述べた。震災の白後にネット上に「宗教者災害救援ネットワーク」を開

さらに「外には気持ち良い風が吹き、おいしそうな桃がなっている。でも、ベクレルやシーベルトの数字しか信じるなど言われている。気持ち良い、おいしいという当たり前前の感覚が通用しない。心

宗派を超えた「宗教者災害支援連絡会」の代表を務める島園進・東京大教授(宗教学)は、阪神大震災時に比べ、合同法要などを報じるメディアが多い点に注目し、「読み手の心に響く話題なのだろう」。

設した稲場圭信・大阪大大学院准教授(宗教学)は「寺院と神社、さらにキリスト教や新宗教などが行政やNPO、大学と力を合わせれば、多くを失った人たちの伴走者になり得る」と語った。